

日本 200 名山 2017/3/19/Sun - 20/Mon

## 久々に心躍った雪山・笈ヶ岳 1,841.3m

山の虫クレマントクラブ（略称 YMCC） 川原健一 同行：川原薫



笈ヶ岳山頂に続く雪稜

加賀白山の北方に位置する笈ヶ岳は日本 200 名山に数えられる。甚だしいブッシュのため未だ夏道が開かれておらず、これに登るためには積雪期しか時期がないということは、今では多くの人にまで知られるようになってきた。しかしながら、近年の登山ブームでも、雪のある時にこれを登ろうとする人は限られ、故に、その人跡薄踏？の魅力はまだ保たれていると言ってよいだろう。春先の連休を利用して、これを日帰りて登らんとて試みた。

3月19日（日）曇り・風雪

車中泊した道の駅から白山一里野スキー場まで移動。ここを発着として笈ヶ岳山頂を目指す。明けやらぬうちに尾添川を渡り、登山開始となる。

中宮発電所の導水管沿いに急こう配を登り、上の貯水池まで一気に 200m を稼ぐ。

さらに 700m ほど登ると山毛櫛尾山（ふなおやま）の山頂に至る。平場にテントが張られている。これは昨日中にここに至ったパーティだろう。早朝、山頂に向けて出発したらしく、人の気配はない。ここから笈ヶ岳までは幾度かの UP DOWN が続く。なだらかな登降あり、急な登降あり、一筋縄では登らせてくれない心躍るバリエーションルートだ。



### 冬瓜山乗越付近にて

最大の傾斜は冬瓜山（かもურიやま）1,627.8mの北側斜面にあり、標高差50mほどの雪の斜面がそそり立つ。条件次第ではいつ雪崩れてもおかしくない所だ。ピッケルを深く刺し、足をしっかり踏みしめて歩を進める。

冬瓜山の稜線に登り立つと緊張から放たれる。たおやかな稜線を東のシリタカ山1,699mに辿ると、遙か遠方に佇んでいた笈ヶ岳がグンと近づいた。ところが笈ヶ岳へ向かう稜線は北を向くと同時に高度を下げ始め、120mほど下ってしまう。そこから主稜線の末端に聳える岩峰を目指す。北西風が冷たく吹き付け体温を奪おうとするが、動いている間は大丈夫だ。主稜線に至るとさすがに山頂は近い。それでもまだ3つのピークを踏み越えて、やっとの思いで笈ヶ岳1,841.3mの頂を踏んだ。



### 笈ヶ岳山頂直下を行く

相変わらず風がやまないのので写真を数枚撮り、早々と頂上を後にする。先ほどの岩峰で、あまりの空腹に耐えかね、吹き溜まりで風が巻いているのも構わずカップ麺を食べるために湯を沸かす。当初12時までに登頂できなければ引き返す予定だったが、山頂に至らないためつい下山のタイミングを遅らせてしまった。明るいうちに帰り着こう。本日中に帰り着こう。撤退時期をじわじわと先延ばしし、山頂には至ったが、それよりずいぶん以前に最早当日中に帰れないことは明白だった。最終下山連絡は最悪の場合を想定して半日ほど先にしていた。問題はどこでビバークするか。

冬瓜山北斜面の悪場は明るいうちに必ず

抜けねばならない。これを目標に歩を進める。踏み跡を急傾斜に踏み込むと、登りとは違った斜面に踏み込んだことに途中で気づく。トレースは明確についていたが、恐らく一人しか踏んでいない。しかも登りでできたトレースのようで、斜面が荒れておらず、ほぼ垂直に近い。これを辿りながら下るのはかなりハートに堪えた。なんとか二人が平場に立った時、陽はすっかり落ちて闇が辺りを包んでいた。幸い天候は穏やかで、北西風も少し緩んだ。

冬瓜山西側の1,420m地点の平場は疎林になっている。ここの山毛櫸の大木の根元に居心地の良さそうな所を見つけ、今宵の壻と定めた。ツェルトの用意はなかったが、パラシュートシートと羽绒服、ザック、マットで防寒し、コンロで暖を取った。頭上は満天の星であり、放射冷却でずいぶん冷え込んだが、足先に冷たさを感じる以外に支障はなく、無事に朝を迎えた。

3月20日（月）晴れ

この日はよく晴れ、春先の雪山の景色を堪能しながら下山した。

5月よりは多い積雪で歩き易いだろうとこの時期に入山したが、正解であった。今回の反省点を活かし、次回の残雪の山も、より楽しめるものにしたいとつくづく思い返している。

END

一里野キー場P	05:24
中宮発電所	05:50
9:20 山毛櫸尾山	
13:44 シリタカ山	
15:45 笈ヶ岳	
18:40 冬瓜山北安定地点	
19:33 ビバーク地	
ビバーク地	06:00
8:40 山毛櫸尾山	
10:20 中宮発電所	
10:55 一里野キー場P	